第九話　紅花と不老長生の思想

嘉永頃（一八四八～五三）伊達桑折の釈遜阿という坊さんが、出羽国に来遊した折、紅花染の赤い着物をつけた子供たちが、若木権現に参詣に行く美しい姿を見て、

紅染着せて御礼参りや小萩原

という句を作っております。当時若木権現は疱瘡神として、地方民の信仰が特に厚く、旧四月十六日の祭典には最上地方の人々の参詣で賑ったゞけでなく、仙台方面の人々の三山詣の際には、必ずこの権現に疱瘡除けを祈りました。これらの参詣人の道標として、溝延村にさえ、「右山寺道、左若木道」と書いた石が立て、あります。遜阿の句は、疱瘡が軽く済んだ御礼に、子供に花染の着物を着せて、参詣に行く小萩原の景色を詠んだのであります。

この句で大切なことは、花染を着せたということで、紅花は元来温りの薬で知られており、従ってそれで染めた着物も、自然そういう効果を持っていたのです。この地方の古い風習では、子供が疱瘡にかゝった時は、ひどくならないように、花染木綿で頭巾を作り、それを被せました。それも同じ道理であったのでしょう。

また子供が生れると、額の真中にポッチリと紅をつけましたし、生後はじめて外に出る時も、同じようなことをしました。若い女の人が外出するような時も、化粧という程でも

なく、唇の真中に一寸紅をつけるという風習がありましたが、これは一種の魔除けであると言われております。やはり紅には病気という魔から守る不思議な力があるものと信じられていたのでしょう。裏日本の雪の深い地方は、子供の佝僂病（セムシ）が多いのですが、昔からこの病気を防ぐために、赤ん坊の額や頭に紅を塗ってやることも行われました。

温りの薬というのは、いわゆる血症薬のことになりますが、紅の塗布によるこの効能は、やがて花染を肌着として着ることも、また冷えの予防と考えられるようになりました。前記の花染の着物や、花染の頭巾を魔除けとし、病気の予防に用いた風習は勿論のこと、全国的に集って来た近地の出羽三山行者が、参拝記念の土産物として山形で求めたものは、花染木綿の類で、特に子供の腹巻とか、婦人の腰巻等は、冷えを防ぐものとして大いに喜ばれたということは、郷土関係の諸書に見受ける所であります。私が前に編した「大町念仏講帳」享保十八年（一七三三）の條に、

午の年、湯殿山の参詣、毎度沙汰致すよりは、存外の参詣これ有り、花そめ下地、前々迄年より商内罷成候。白岩より奥山内は、拾年計りは寝て喰う程にまふけ申候由、八口の道は都合五万七千余これ有り候由、扨に夥しき事に御座候。

と見えますが、関山口から来た南部下仙台方面にかけての行者に、谷地の商人が花染を商った記事であります。行者達はこれを以て腹巻をして登山すれば、決して濕患に侵されることはないと、登山前の宿場で買うことも多かったようです。

三月節句の雛壇の前に飾る紅白の餅は、如何にも若くてふくよかな少女を思わせるに相応わしいものですが、あの落ちついた紅色の紅は、食用紅でありますし、同じく麩菓子と

言う菓子の色もそれであります。その他祝い事の際に作る紅白の餅も同様でありまして、何れも季節の折目折目に紅を食べる習わしの遺風になっておったようです。

最上地方の女の子の手毬唄にこんなのがあります。

れんげ　れんげだら　座敷をさらりと
れんげ　れんげだら　白粉つけろ　さらりと
れんげ　れんげだら　紅つけろ　ポチョリと
れんげ　れんげだら　帯しめろ　ぎっちり〈
れんげ　れんげだら　旦那様今日は

次に支那の古い話を一つ書きましょう。明の李時珍の著「本草綱目」の紅藍花の條に載っていることですが、徐氏という者の婦がお産をして、そのために死にました。驚いて体に觸れてみますと、胸の辺りに未だ僅かな温かみが残っておりますので、当時名医と言われた陸氏に診察してもらったところ、これは血が凝えたのである、紅花数十斤を得れば活かすことが出来るであろうという。大急ぎで家人がその準備をすると、陸氏は窓の下に三つの桶を備え、紅花を煮た湯を注ぎ、死人をその中に入れておき、湯が冷えれば又別のものを注ぐこと再三、斯くすること数時でありましたが、死人はやがて指を動かし、半日程して遂に蘇生したとあります。

この本には、紅花を薬用として、六十二種風、腹内血気痛、一切腫疾、喉痺雍塞、熱病胎死、胎衣不下、産後血運、聤耳出水、膻膈拒食等の場合に効果があると書いてあります

が、漢方薬の方では、昔から血の薬または温リの薬として、盛んに使用されたもので、紅
療法を唱えている人々の間には、今でも万能薬とされております。効能を述べるものは、
大体「本草綱目」に載せてあるものに依っている様ですが、薬用としての紅花を調べられ
ている原田善明氏は、その効能を次のように整理されております。

一、血行障害の除去。悪血を去リ、造血を促進せしめる。あたゝまりと言われるのは、
この作用をいうのである。

二、通経薬として使う。

三、分娩促進、特に破水を促進させる。

四、胎児死亡の場合、紅花酒を二三杯飲用すれば、死児が下リる。胞衣が下リない場合
にも用いられる。但し普通懐妊の婦人には禁忌とされている。

五、一般産後の血の道に、紅花酒として服用する。

六、小児のあせも等には、ハコベの汁にて葛粉等と練リ合せて貼用する。

七、小児の胎毒には、大黄、沈香、黄蓮等と混じて服用させる。

以上をみると、その用法は主として紅花を酒に浸レ、紅花酒として服用するのでありま
すが、そのためには、年々散花として干燥させておくことが必要であります。弘化四年版の
「重訂本草綱目啓蒙」に「銭ばなに成さずして、辨を摘み採りたるまゝに出すものあり。
これをつみなりと云う。又じばなとも云う。唐山にてこれを散花と云う。伊勢美濃より出
るは皆つみなり。薬にはこのつみなりを用ゆ」と記レてありますが、最上地方ではこの散
花を乱花干といっております。現在でも他県の一部にこの乱花干を作る所がありますが、

これは家庭の常備薬として売出される、婦人のいわゆる「血の道薬」の配合薬に用いられるそうです。

漢方薬としての紅花は、昔からこのように医学的に使用され、またその効果が認られているのでありますが、紅に関する前記のような民間習俗というものには、それだけに経験から生れた深い根拠のあったことなのです。しかも、冷え性に特効があったので、その習俗も婦人に関するものが多かったのも当然のこと、言えるでしょう。

紅という語が日本に見え初めたのは、「古事記」下巻仁徳天皇の條下でありますから紀元からすれば三百年代に当る訳です。従ってそれが支那から伝来したのは、恐らくは紀元前のことゝなるでしょう。その後奈良時代には、薬草園にこの紅が植えられておりますし、平安時代の初期に出た「延喜式」等を見ますと、その当時、宮中御用として多量の紅が使用され、全国六十八ヶ国中二十四ヶ国から貢物として徴用しております。染色用の赤色としては、古くから茜を用いておりましたが、その茜と異った立場で、この紅が広く日本人に愛用されるようになったのは、おっとりとしたその色彩から感じられる好みだけでなしに、この紅の持つ医学的な効能からもあったものと考えられます。

最上地方に紅花が植えられるようになったのは、恐らく中世末期頃からであろうと思われますが、気象や土質が適しているからでしょうか、その普及速度が非常に早く、立ち処に全国第一位の生産量を見るに至りました。その品質もまた他に勝れ、文元三年（一七三八）の清水清氏所蔵文書等にも見えるように「古来随一の出来に御座候て、御召類染め来った」という、由緒深い歴史を持つようになりました。最上紅花が京都に送られなかった

年等は、良質の紅花を買い集めることが出来ず、幕府の御用商人が非常に困ったという事実もあります。東根の後沢村太田幾右エ門は、文政五年（一八二二）に伏見宮家の執事から次のような「申渡」を受けております。

申　渡

太田幾右エ門

右は今般当御殿御館入、並に姫宮御方、絲、真綿、紅花調進の御用立御貸附の儀、願の通り仰付けられ候。然る上は、御用向懈怠無く、恒例の御礼式御法令大切に相守り御為第一にこれ有るべきもの也

右貳人扶持分の事

文政五午年二月

伏見宮御内

黒田頼母

福井数馬

幾右エ門は、自作の紅花の外に、絲と真綿を伏見宮家御用として納入し、貳人扶持という待遇を受けていた訳でありまして、最上百姓但人としても、非常な光栄を擔った訳であります。

明治に入ると、色々な経済事情は、この紅花栽培を衰微させ、それに代って支那紅や洋紅が流行して来たのですが、古法伝統を守る皇室関係の諸行事には、総て在来の本紅を用いられます。御即位大礼式、伊勢皇太神宮式年御遷宮式、明治神宮御造営式等の場合には

大量の最上紅花の注文を受けましたが、生産が減少しておる時代のこと、て、その調達を命ぜられた山形の岩渕氏等は、想像以上の苦心をして、漸く間に合せました。しかしその甲斐がありまして、現在岩渕氏の秘蔵される御調度品の織物の小布等を見ますと、その美麗精巧さに全く驚かされます。岩渕氏がこういう重責を果したことについて、陰の力となったのは、高擶や志村の多くの農民たちでありました。最近の伊勢神宮式年祭は、去る昭和二十八年の秋に行われましたが、その時は「山形紅花振興会」の努力により、前年度産の花餅一貫八百匁を納入いたしましたが、これも全く出羽志村の方々の協力によったことでした。

御用品の生産につきまして、最上の農民たちが、このように純情素朴な態度で協力したこと、最上紅花の保存振興に志す人々が、このように感激をもって努力しているということは、それは必ずしも御召物や御調度品の染料として採納になったという、単なる光栄感からだけではなくして、高貴な方々の御健康と御安泰ととを、紅花のもつ薬物的効能によって守ろうとする大切な観点が、心の底にひそんでおり、それが自然と表われて来るのであろうと考えられるのです。本草学という薬学の研究が、古くから支那に行われており、それがやがて日本に伝わり、そして盛になったのも、その根本をさぐれば、やはり人間の不老長生を求めるところの思想にあり、その精神を紅花というものを通して、自分の生命を守り、自分の新しい人々を病魔から救い、そして自分たちの尊敬し敬愛する方々の不老長生を希うという、日本人らしい深い精神が生じて来たのでしょう。